

(9) 医療型療養病床の看護師の死生観と終末期看護に対する認識態度との関連

川崎医療福祉大学大学院 保健看護学専攻 修士課程 ○高原 和恵

川崎医療福祉大学 保健看護学科 竹田 恵子

【要旨】

【目的】

医療型療養病床で働く看護師の死生観と終末期看護の認識や態度との関連について、死が間近の患者の看護に対する不安の程度別に明らかにする

【方法】

終末期看護を実施しているA県の医療型療養病床の看護師を対象に、無記名の自記式質問紙調査を行った（配布数995部）。調査の内容は、対象者の背景、岡本らの「死生観尺度」6因子25項目、中井らの医療者のターミナルケア態度尺度〔日本語版FATCOD-Form B-J〕3因子30項目等であった。死が間近の患者の看護に対し「不安がある」（I群）、「どちらでもない」（II群）、「不安がない」（III群）の3群に分け以下について死生観と終末期看護の認識、態度との関連について比較検討した。

【結果及び考察】

688名の看護師より回答を得た。有効回答の得られた617名を分析対象とした。群別にみた対象者

は、I群199名、II群232名、III群186名であった。各群とも女性が大半を占め50歳代が最も多かった。医療型療養病床での勤務年数の平均は、ほぼ同じで、看護師としての経験年数は、I群、II群、III群の順に長かった。死生観では、「死の準備教育」でII群とIII群に、「死の不安」でI群とII群、III群、「人生の終焉」でI群とII群に有意差がみられた。死生観と終末期看護の認識、態度との関連では、各群共に、死生観の「死の準備教育」と医療者のターミナルケア態度尺度の「死にゆく患者へのケアの向きさ」「患者・家族を中心とするケアの認識」に正の相関がみられた。このことは、死が間近の患者の看護に対する不安の程度に関係なく、「死の準備教育」の必要性を感じている人は、「死にゆく患者へのケアに前向き」で、「患者・家族を中心とするケア」を志向していることが明らかになった。以上のことから、各群の特徴を踏まえた死の準備教育を行うことが終末期看護の向上につながる可能性が示唆された。